

はない、とまったく當然のことを言つた田母神空壽長を雷光石火の早業で更迭してしまふ。

例はこれくらゐでいいだらう。情なくてこれ以上書く気がしない。

奪はれた歴史は自らの手で奪ひ返さなければいつまでたつても腑抜け國民のままであなければならぬ。

それを脱するには何らかの契機が必要であるが、表題内容こそ恰好の實例であると思ひ筆を執つた次第である。

なほ、昭和二十六年のマツカーサー発言が何故こんにちまで殆んど知られずにあるのか、と疑問を抱かれる向きがあるかもしれない。

それに對しては、本當のことを知られると困る人達が大勢ゐるからである、とだけ答へておく。

平成二十二年庚寅四月三十日記之

サンクト・ペテルスブルグでの出会い

昭和五十年入学 稲賀 繁美

平成二十二年三月下旬に、ロシアのサンクト・ペテルスブルクを訪ねた。ようやく春の到来を告げる季節だが、ネヴァ河はまだ凍結しており、時折朝日が射すと、銀色の光が水平線低くから河面を照らして、目映いほどの光景となる。

参加したのは、Global Cézanne Effect と称する会合で、二〇世紀前半、世界でいかに画家セザンヌの「効果」が波及したかを論ずる国際学会だった。旧市街中央近くに佇立するイサク聖堂から、ワン・ブロックほどの川のほとりに、かつての元老院の宏壯な建物があり、昨年ボリス・エリツィン大統領図書館に

改装のうえ開館された。といつても一般の市民が閲覧のために訪れる場所ではなく、もっぱら歴史的な貴重書を電子化する作業基地・展示場であり、また文化的な催しもの会場として大広間を活用する目論見だという。ロシア・フランス年である二〇一〇年を記念して、「セザンヌ効果」国際会議も、この会場で開催された。

会議二日目の午後には、フランスの政治家、文化人としても著名なド・ヴィルパンがふいに会場に顔を出し、請われるままに、フランスとロシアの文化交流を回顧し、将来への展望を語る即興の演説をぶつた。スラリとした長身で、なかなかの美男子、しかも運動神経も抜群で、決断力や行動力には定評もあるド・ヴィルパンは、次期フランス大頭領の有力候補。ゴースト、つまりいわゆるド・ゴール派の人物だが、現在のサルコジ大統領とは、政治方針について最近袂を分かち、外務大臣を辞任した分、外交で点を稼ごうと、おりからロシア訪問中だった。良き意味での文化的な教養が見事に生きた演説で、聴きながら、日本には、政治家にも外交官にも、こんな見事な芸当のできる人物など、ひとりも見あたらないな、と改めて情けない思いをした。一服の演説をこなしたド・ヴィルパンは、いたつて気さくに客席につかつかと歩みより、ちらりと会釈をしたかと思うと、いささかの躊躇もなく、なんと当方の隣の椅子に着席してしまつた。おそろしくこんな近くで接することは、もう二度とないだろうから、備忘録までに自慢話？をしておこう。あまりの無防備さに、後で一寸話でもしてやるか、などと悪戯心も芽生えたが、ご本尊は二〇分ほど発表を聴いたところで、お付きに促されて立ち上がり、主催者たちとともに会場を後にした。

サンクト・ペテルスブルクはロシア第二の大都会。ピョートル大帝によつて、ネヴァ河河口の湿地帯を埋め立てて建設された計画都市であり、現在も中心部にはエルミタージュ美術館をはじめとする歴史建造物が建ち並び、ロココ様式の佇まいをみせている。中心にはアレクサンドル・ネフスキー通りが東西に貫

通して、その周囲に繁華街が広がる。日当たり側と日陰側で、賃貸料も違えば、窓の設えなど、店構えまで異なっている。経済自由化とともに市街は活気を見せており、若者が闊歩している。そこからグリバエードフ運河を跨ぐ橋の袂を、運河にそって南に下ると、タマネギ型の屋根で有名なカザン聖堂まですぐだが、このあたりが中心街といつてよい。運河と大通りの交わる南東角の、日当たり側二八番地、シンガー社の建物は、二〇世紀初頭の通称「モデルン」様式の建築で、花崗岩の外壁にはさまざま彫刻が飾られており、頂上に地球儀を乗せたガラス張りのドームが、ひととき目立つ。その一階、ドム・クニギ書店では、新刊のめばしい書籍が簡単に手に入る。店内にはカフェや土産物コーナーまで備わっていて、おちついて本や絵はがきを物色できる。巨大なガラス窓に照らされた店内は、天井も高く、広くて明るい。

市内に張り巡らされた運河沿いには、牛肉料理の名前でも馴染みのあるストロガノフ邸や、詩人プーシキンが決闘のあと命を引き取った家なども、博物館に装いを改め、歩ける距離に、あちらまたこちら、と点在している。重厚な石造りの建物が軒を並べ、こうした運河像の街路の日陰側に足を伸ばすと、まだ根雪が残る歩道では、清掃員たちがピッケルを手に、少しずつ雪のブロックの切り出しを始めていた。排気ガスを吸って石炭よろしく真っ黒になった氷の塊が切り出されては、歩道のあちこち、日本車を含む自動車行列をなして駐車している間に、堆く積み上げられ、ときおりトラックで運び去られる。日光が差すと、立派な建物の軒からは雪解け水が歩道に落ちてくるが、地元の人々は、気にも留めずに、雨だれを浴び、雪解け水で泥べちゃとなった路の上を、長靴を履いて平然と行き交っている。その歩道に透明なガラスの棒のようなものが何本も並んで居るので、何だろ？と不思議に思っていたら、雨樋から吐き出された氷の塊だった。排水の雨樋は、日本の1倍はあろうかという大口径だが、夜のあいだに管のなかで凍結した氷が、朝ともなると、すこし溶解したからだ

ろうか、樋の先端から透明な氷柱となつて歩道に降りてくる。おそらくそれを見越して、雨樋のパイプも、ことさら太く設計されているに違いない。さながら春の息吹と、冬の名残が同居している風情で、北国ならではの風物といつてよいだろう。

などと書いてきたが、別に観光案内をしようというのでも、また学会の報告を申し上げようというのでもない。こんなこともある、という体験をひとつ、以下ご参考まで書き付けておきたい。

当方の宿舎は、カザン聖堂広場に面する老舗、アストリアを宛がわれた。学会の最中にエリツイン図書館の職員のひとつから、近所にお勧めのレストランがあると聞き、レセプションで場所を確かめると、イサク聖堂南の路を西南に徒歩10分ほどの近場だった。電話で予約をお願いすると、幸い今宵はまだ席がある、という。教えられた道筋を行くと、アパートの続く通りの右側に「logis」とアルファベットで地味な標識があがっている。その通路を伝ってアパートの中庭に出ると、一角が囲われて裸電灯が幾つも灯っている。照明に誘われて進むと、階段があり、半地下の入り口となっている。教えてもらわなくては、とてもレストランとは分らないような地味な作りだ。一般に寒さの厳しいロシアでは、おおきな公共建築には巨大な扉があつても、そこには人間が出入りする為の小さな扉が付随している場合が多い。レストランの門構えも、戸口だけは、いたって小さい。半地下の造作が多いから、外からでは、はたして客があるのかどうかも判然としない。

だがその戸を潜ると、半地下にはいわゆるダーチャ形式の、アパートが広がっている。テプロという名前のそのレストランもそうだった。外からはまったく窺いしれなかったが、週末の夕刻ともなると、地元の若い人たちを含めて、次々に来客があり、すでにほぼ満席状態。店内は落ち着いたなかにも活気に溢れている。半地下には、部屋の奥にまた次の部屋、といった調子で客間から台

所、家族部屋から喫茶コーナーと続き、一部屋ごとに、異なった趣向を凝らした内装の空間が、深々と、連続と続いている。いかにもプロに注文した、というのとはひと味もふた味も違う手作りの設えで、最後にエル字型に曲がった先には、なんと幼児たちのためのカラフルな室内遊び場まで準備されていた。家族連れでの団欒にも対応できるように、という配慮なのだろう。

お店というよりは、一般の家庭に招かれたというアット・ホームな感覚を信条としているらしく、毛皮を敷き詰めた絨毯のうえに、普通の家庭の居間という雰囲気のスファアが置かれた一角もある。トイレにもカラフルなタイルが貼り込んであって、金属製の洗面器も含めておそろしく清潔で、流される音楽も気が利いている。経営者はじめ従業員も、プロのウエイトレスとお呼びするのは相応しからぬ、ごく普通のその辺のお姉さんたち、といった風情。経営者の主旨に賛同して、ひとりひとりがこのお店を盛り立てようとしている気概が伝わってきて、好ましい。メニユがまた凝っていて、日本でも近年人気の、ドアノ一の《市庁舎の前の接吻》をはじめとする往年の歴史物のモノクロ写真や、オーナーの両親と思しき家族写真などを貼った古いアルバムに、料理の一覧が並んでいる。注文とりの女の子の中には、まだ英語や外国語は苦手というはにかみ屋さんもあるが、話が混み入ってくれば、外国語に堪能な男の子が代わってくれる。隣では先ほどから英語の達者な女の子が、ドイツから来たお世辞にも英語がうまいとはいえないお客さんたちと、なにやら新案のカード遊びについて、熱心に話し込んでいる。料理は無国籍西洋料理にロシア料理を加味したレパートリーで、当方の好みからいえば、ソースがやや甘口だったけれど、魚の焼き具合など、薪を使っているためもあってか、見事なできばえ。気の置けない家庭料理の良さが出ていて、連日の宴会料理に食傷気味だった舌も心地よく、胃にも優しい献立である。

その室内一角に世界地図が貼ってあり、ピンがあちこちに立てられている。

さてはお客の出身地がピンで示されているのだろう、と思つて尋ねると、そのとおりのお答え。なんでも日本からのお客は初めてとのこと、勧められて家内がピンを立てに行った折だった。その側らのテーブルに座っていた男女二人組のうちの男性が、いきなり「どうぞ、どうぞ」と達者な日本語で場所を譲ってくれた。どうして日本語を、と尋ねると、なんでも合気道をやっているのだという。

伺つてみると、Vasilyさんはまだそれほどの年齢とも見えないが、五段の実力者で（海外で五段というのは、たいへんな高段者）、近くに道場を開いているという。最初はフランスのプザンソンで田村先生に教わったのだ、という。まさかサンクト・ペテルスブルクで田村師範のお名前を耳にするととは思わなかった。いうまでもなく、戦後初めてフランスに合気道を伝え、ポルドーにお住まいの、いまや伝説的な「老師」である。この町では合気道は盛んで、自分のほかにも、養神館や、富木流もふくめ、四つほど道場がある、とのこと。残念ながらが翌々朝午前三時過ぎには帰国便に搭乗せねばならなかったため、今回は、道場に参上してお稽古を、という時間の余裕はなかった。だが、また機会があれば、是非お尋ねしたい、と再会を約し、握手してお別れした。お店では、「日本人第一号」だから、というのでお手製のクッキーまでお土産をつけてくれた。

サンクト・ペテルスブルクは日本語教育も盛んな土地柄であり、日本からも多くの留学生がある。赤門合気道部の現役諸君にも、留学を志す方があれば、と望んでいる。この秋にもNHKで司馬遼太郎原作『坂の上の雲』第二部が放映される予定だが、第一部を、覧の皆さんなら、「軍神」広瀬武夫が、若き日に駐在武官としてサンクト・ペテルスブルクに滞在した場面を覚えておられることだろう。恋敵のロシア士官を見事柔道で投げ飛ばした、という場面には、いささか脚色も加わっている。だがロシア武官令嬢との敵味方を越えた恋は、まぎれもない史実だった。その歴史ロマンスにも関わる海軍省の建物や、宮廷広

場、アレクサンドルの円柱のほとりの旧参謀本部あたりが、史事を踏まえて、ロケ地として使われていた。そんな秘話探訪の折には、司馬遼太郎の「国民文学」だけでなく、とりわけ「ロシアからの愛」「海を越えた恋文」を再発見し、TV番組の下敷きにも使われた、島田謹二『ロシアにおける広瀬武夫』も是非ご一読をお勧めする。そして聖石都来訪のおりには、せつかくの機会だから、ヴァシリイさんの道場にも顔を出して稽古を付けて戴いては、いかがだろうか。留学先でお稽古事の同好の士がみつかる、そこから思いもかけないような、いろいろな交友の輪が広がる。そんな切つ掛けを大切にして戴きたい。

平成二二(二〇一〇)年四月一八日

(註) Vasily さんの道場は、sutemidojo@yahoo.com またはストラン Teplo

は電話 570-1974, www.v-teplo.ru ただし気に入ったからといって、決して『地球の歩き方』などには投稿しないように。日本人観光客が押し寄せると、店の雰囲気が変わってしまいます。本当に良いお店を見つけた時は、友人にだけクチコミで伝えましょう。なお、サント・ペテルスブルクの都市と文化に興味のある方には、ロシアにも滅法強い、海野弘『サント・ペテルスブルク浮上』もお勧めです。末筆ながら、ほぼ同一文が『三重大学合気道部OB会誌』二〇一〇年版にも掲載の予定であることを、ひとことお断りします。

卒部後の稽古のすすめ

平成四年入学 千葉 陽一

赤門空気を懐かし
24.22.06.26

数年前、七、八年のブランクを経て至誠館に再入門しました。社会人になると思うように稽古時間を確保することは難しくなりますが、より考えながら稽

古するようになったせいか、学生時代とは違った上達をしているように感じています。卒部後に再開した稽古でどんなことにもどのように気付いたかまとめることで後輩の皆さんに役立てることもあるかもしれないと思い、恥ずかしさを堪えて拙文を寄稿することにしました。

学生時代、先生方から、「下腹に気を集める」よう繰り返し指導していただきました。当時は、何となくわかつたつもりになっていましたが、自分の体の動きに反映できている自信はありませんでした。このまま稽古を継続しても目標とする体の使い方にたどり着けないのではないかと、やや消化不良の思いを抱いて卒部してしまつたというのが偽らざる心境でした。仕事の忙しさよりもこうした思いが稽古から離れてしまつた一番の原因だったと思います。

稽古再開後しばらく経つたころ、改めて四股の踏み方を指導していただく機会がありました。私はそれまで足の裏の外側に体重を乗せた状態でやじるべのようにバランスをとりながらも一方の脚を上げていたのですが、指導を受けて土踏まずの辺りで自分の体重を支えつつ、膝下と太腿の内側(股側)の筋肉を使つてもう一方の脚を引き上げるようにしました。しばらくこのように四股を踏んでいると、木剣で袈裟切りをしているときに膝が外側に開いてしまつていることが気になるようになったのです。膝が外側に開かないよう膝下と太腿の内側の筋肉を意識しながら稽古を続けていると自然と自分の中心軸が感じられるようになりました。学生時代に膝を閉めて剣を振るよう繰り返し指導しながら様々な技の稽古を続けているうちに、今度は正中線をはっきり認識できるようになり、正中線上で力を使う場合とそうでない場合とで力の伝わり方が全く異なることを実感しました。ほぼ同時期に相手の正中線も敏感に感じ取れるようになり、合気道の技のひとつひとつを見直すことに繋がりました。

このような感覚の変化を自覚する一方で力の出し方も変わっていききました。

平成二十二年度 第五十一号

赤門合気道

東京大学合気道部
赤門合気道倶楽部